



**Philippine EX**  
**2013**  
**Team A**

*International Student Association*

*2013/03/01~03/10*



## 目次

団長挨拶 …3

Ex. 概要 …4

参加者リスト …5

Schedule …6、7

事前勉強会報告 …8

文化紹介感想 …9

Diary …10~25

フリーテーマエッセイ …26~44

必要な物リスト …45

編集後記 …46

# 団長挨拶

神戸支部 甲南大学 3年

木澤 雄介

今回私は、フィリピン Ex. の団長を務めさせていただきました。初海外、初海外プログラム参加の自分に団長を務まるのか、初めは不安がいっぱいでした。実際、プログラムが終わって振り返ってみると、自分よりも英語が堪能な先輩、自分よりもフィリピーノと仲良くなるのが上手い後輩、自分よりもメンバーの不安を吹き飛ばし場を盛り上げるのが上手い後輩、自分よりもメンバーに目を向け微妙な変化を感じ取っていた同期等など、スペックの高いメンバーに囲まれて、自分はお世辞にも良い団長だったとは言えません。と言うよりそもそも、自分の中で「良い団長」というものを固めていませんでした。漠然とあったのは、「どのメンバーよりもフィリピン Ex. を楽しむことのできる人。」でした。それでさえ実行できたのかは微妙なところ。B 日程の人たちが見せてくれる写真、聞かせてくれる話から、B 日程の人たちの方が楽しんでいたのでは？と思うこともしばしばありました。でもでもでもでも！！メンバーたちとの思い出を思い出すと、B 日程の人には申し訳ないんですけど A 日程の方が 10000 倍楽しかったと思います！いつでも恋人ののろけ話を聞かせてくれる後輩、最初はフィリピンでミネラルウォーターで頭を洗っていたけど最終的にはフィリピーノスタイルで入浴できた後輩、メンバー一人ひとりに手紙を書き寄せてくれた後輩、クレイジーと指をさされて笑われていた後輩、団長だからって気を張りすぎることないと言ってくれた同期、フィリピーノにモテてモテて仕方なかった後輩、いてくれるだけで自分の心の支えになってくれた先輩等など素晴らしいメンバーに囲まれていました!!!

Ex 最終日、フィリピンから帰らないといけないことはもちろん寂しかったです。でも、メンバーと離れなければいけないということの方が自分の中では大きかったと思います。やはり海外で寝食を共にした人たちには強い思い出ができますね。こういうことを言うのは I. S. A. 的にどうなのかわからないのですが、私はメンバーに恵まれたと思います。「メンバーが変われば Ex. も変わる。」これは、現地コーディネーターの方の言葉です。自分は今回の Ex を最高のメンバーと作り上げることができたのではないのかと思います。この文章をいったい何人の人が読んでいるのかはわかりませんが、読んでくれた人に言いたいことは、フィリピン Ex. (フィリピン Ex. だけに限らないとは思いますが) は、人の優しさを知ることができるプログラムです、この「人」というのは、フィリピン人のことだけではありません、フィリピン人の優しさを知ることができるとともに、日本人の優しさを知ることが出来ます。

自分は今回の Ex. で団長をできたことを誇りに思います！メンバーに恵まれるのって正直、団長の…ってか木澤雄介のカリスマ性じゃね？

# Ex.概要

## 開催の目的

ファームステイやホームステイをし、フィリピンの生活を体験する。その他、フィリピンの人々・学生との交流、観光、文化紹介などを通じて、日本とフィリピンの相互理解を深める。

## 協力団体・協力者

Youth Aid Philippines

## 場所

フィリピン マニラ市、ネグロス島（バコロド、ドゥマゲッティ）

# 参加者リスト

神戸支部			
名前	学年	大学	役職
石川高寛	4	甲南	勉強会係・薬係
岩崎薫	2	甲南	文化紹介係
木澤雄介	2	甲南	団長、広報局長
小川理沙	1	関学	チケット係
近藤優哉	1	甲南	副団長
佐々木唯衣	1	関学	広報・ML・FB
田井菜々子	1	関学	文化紹介係
竹山佳菜望	1	甲南	財務
鶴田宏美	1	甲南	報告書・パスポート・保険係
土内茜	1	甲南	報告書・パスポート・保険係
土肥慎一郎	1	甲南	副団長
東佳太	1	甲南	勉強会係・薬係
堀口将太郎	1	関学	チケット係
藪淵絢子	1	関学	広報・ML・FB
山島陽香	1	甲南	勉強会係・薬係
大阪支部			
近藤夏奈	2	関大	文化紹介係
頼光拓真	2	関大	報告書・パスポート・保険係
京都支部			
松岡将貴	1	京都教育大	報告書・パスポート・保険係
東京支部			
富永憲爾	4	慶応	国際渉外
江畑俊行	1	立教	文化紹介係
九州支部			
杉谷香波	1	北九州市立	広報・ML・FB
吉村奈七美	1	北九州市立	報告書・パスポート・保険係

# Schedule

Date	Location	Accommodation	Activity
Day1 03/01	マニラ	El Cielito Hotel	開会式、マニラ観光、 SMモール
Day2 03/02	バコロド/ ドゥマゲツ ティ	ファームステイ	ローカルツアー、 ファーム生活体験
Day3 03/03	バコロド/ ドゥマゲツ ティ	ファームステイ	ファーム生活体験
Day4 03/04	バコロド/ ドゥマゲツ ティ	ファームステイ	小学校訪問、 ファーム生活体験

Day5 03/05	バコロド/ ドゥマゲツ テイ	ファームステイ	高校訪問、ボランティア活動、フィエスタ
Day6 03/06	バコロド	ホームステイ	ウェルカムランチ、大学見学、ホームステイ
Day7 03/07	バコロド	ホームステイ	ネグロス島ツアー、ジョリビーでランチ、ディスカッション、ホームステイ
Day8 03/08	バコロド	ホームステイ	パンプボート、ビーチ、ホームステイ
Day9 03/09	バコロド	Go Hotel	ホストファミリーとのフリータイム、文化紹介、フェアウェルパーティー
Day10 03/10	マニラ		閉会式

# 事前勉強会報告

2月25～26日 フィリピン Ex. 勉強会

神戸支部 甲南大学4年  
石川高寛

上記の期間フィリピン Ex. の A チームの勉強会を行いました。午前中にはアイスブレイクを甲南大学で行い、ほとんど初めての仲間と共にフィリピンに関するクイズを行いました。午後には甲南大学の施設でフィリピン周辺知識を深めるために各自で調べたことを発表し合うことや共通語である英語での簡単な会話を行い最後は文化紹介で発表する「PONPONPON」や「tomorrow」、「top of the world」の歌やダンスの練習を行いました。勉強会の後はメンバー同士での雑談やゲームを通じて親睦を深めました。

勉強会での反省点としては、フィリピンの言語についても少しは学んだほうが良いかなと個人的に思います。理由は現地語を少し話すだけでもホストの方やお世話になる現地メンバーとの距離が縮まると感じたからです。勉強会時にはフィリピンには様々な言語があるためどれを学べばいいのかわからないと敬遠していましたがマニラではタガログ語でバコロド（ラサール大学がある地名）ではイロンゴ語を使っていたのでこれを読んでいただけた方は日本で調べられる程度でメモしておくと思えます。

# 文化紹介感想

東京支部 立教大学1年  
江畑 俊行

私たちは、歌2曲と踊りを日本の文化として紹介しました。内容は日本の伝統的なものではなく、今の10代の間で良く知られているものを選びました。日本の文化紹介の時間というよりは、「お別れ会」として行いました。日本の伝統的なものではなかったため、日本の文化を伝えられるのかという多少の懸念はあったものの、結果として、現地の人たちと共に盛り上がることができ、最高の形で文化紹介、そしてフィリピンEx.を締めくくることができたので良かったと思います。歌や踊りの代替案として日本の遊びや食文化を紹介するなどがありましたが、フィリピン人は歌や踊りで楽しく盛り上がるのが好きなので、盛り上がるものを選んだのは正解でした。このような文化紹介の機会でお互いの文化を紹介しあうことは、異文化交流を行う上でとても重要なことであるため、フィリピンの学生との交流は目的の1つであるため、良いコンテンツであったと思いました。これを機に日本の文化に少しでも興味を持ってけると幸いです。

# Diary

DAY1 3月1日(金)

神戸支部 甲南大学4年  
石川高寛

フィリピンのマニラは思っていたよりも都会だった。しかし、車の行き来はひどいものがあって車線関係なしだ。

観光客が乗るものにはカデッサ、ジブシー、タクシー、あと自転車のやつ。わかる人にはわかると思う。

交通情報はそれくらいにして初日は歴史を学ぶ名所、ホセリサール広場、SMモール。各地で共通したことは韓国人に間違えられることだ。アニョハセヨとすごく言われる。見分けがつかないのだろう。しかし、日本人の人気は結構あるんです。びっくりしました。声をかければ答えてくれるし楽しんでくれる。なんでもいけるんじゃないだろうか。

結局一日中歩き回って足が疲れた明日は5:00だ。早く寝よう。まあこれ書いたのは2日目の5:05なんですけどね。ホテルのロビーなうです。とりあえず、今日はファームへ行きます。それじゃ！

神戸支部 甲南大学1年  
近藤優哉

まずホテルの朝食すごくまずかった。初フィリピンでの食事だったので食べた瞬間、僕がこのEx.は終わったなって思いました。それほどにまずかった。特にソーセージ。一度口に含んで、それを吐き出し、また丸めてソーセージにしたような食感。フィリピン人の舌はほんとにクレイジーだと思いましたが、ここでやっぱり日本人の舌とは違うんだな、僕は今、日本ではないフィリピンにいるんだなと不思議と実感しました。

ホテルの部屋はとても快適とは言えませんでした。のちのち思うと最高に快適でした。シャワーの重要性。フィリピンではとてもシャワーが恋しくなりました。ただこのシャワーの水圧には笑いが止まりませんでした。日本の高度な生活基準に飼い慣らされた僕にはシャワーひとつとっても、とても新鮮でした。

オープニングではカルロがとてもおもしろかった。ただあの狭い空間でダンスはしたくなかった。ジュースおかわりなしは頂けない。以上。

マニラ観光はホセ・リサールの城壁を観光した。観光の途中、日本人の墓があったのがフィリピン人の優しさに感動した。そしてここではじめて乞食をみた。教科書でしか見たことのない存在でああ、やっぱりいるんだ。すごーいと感じた自分に驚愕。

また日本の庭園を再現した公園に入ったのだが雑すぎてびっくりした。そんな雑な公園でイチャつくカップルが残念でした。僕が世界に名を馳せる金持ちになればまずこの公園を改築しようと決心しました。まだその気持は変わりません。

最後に SM モールというショッピングセンターに行きました。日本と値段が変わらなくて全く面白くなかったです。ただ、ビフォアで仲良くなったカルロの友達と再会できてゲームの話で盛り上がった場所、機会を与えてくださった SM モールには感謝しています。

九州支部 北九州市立大学1年  
吉村奈々美

いよいよ今日から始まりました、フィピンEx！朝は7時からの朝食に備えて6時起き。ローのところで朝ごはん（パン、パイナップル、ライス、お肉、魚のあげもの）を食べました。8時半からはオリエンがスタート！！参加費を払って、めっちゃめっちゃ可愛い文字が書かれたノートや、フィリピンのお菓子、小物をもらった。クオリティーの高さにびっくり。それからExの説明、スタッフさんの紹介の後、フィリピンのユースと日本の間での違い（バイト、音楽、ファッション、娯楽について）をディスカッション。流暢に英語を話すフィリピン人の言葉が聞き取れず苦戦しました><。そのディスカッションではフィリピン人はバイトをせずに勉強を知った。その後はランチ！かおるさんからアフターで行くマレーシアのことや、トラジャExの話聞いて嬉しかった(\*^ω^\*)13時からマニラ観光！まずはバスに乗った！となりはタケシ！！THE MANILA CATHEDRALの前についてバスを降りた。そしてお土産やさんを少しみてから、馬車にのってホセリサールの博物館へ行った。外国で行く博物館はとても好きだったので嬉しかった。ホセリサルは名前を聞いたことあるけど、何した人なのか全然分からないので帰ったら調べようと思います。とても暑かったけど、Prisonからの足跡を見れてよかった。歩幅が小さかったのが、ホセリサールの気持ちをすごく表していると思った。それからまた馬車にのりバスのところまで戻った。馬車に乗っているときに、急に座席が落ちて私も落ちた！とてもビックリしたけどとても楽しかった。次にいったのは公園でここにもホセリサールの像があった。その公園には日本庭園もあって、橋の上でジャンプしてめっちゃめっちゃ楽しかった。ここでは理紗と沢山話せてうれしかった。庭園で一段落して帰る途中でかわいい学生さんたちがアニョハセヨとか言ってくれた。私は日本人だー。そしてその学生さんたちにマサキはもてていた。この時はまさきのこと知らなかったけど、やっぱり最初からすごかったんやなー。そしてアジアー広いモールに行くまでのバスではみんな寝てた。お疲れ様！みんなの寝顔が撮れて嬉しい！だけどその写真はファームの子に消され

てしまったよ><。モールに着いたらサングラスを買ってジャパニーズレストラン (KITARO) で夕飯を食べた。かれこれ北九州を出て10日目やったから、日本食を恋しく感じていた。餃子ラーメン食べたけどスープが真っ黒でから少しまずいのかなと思ったけど、実際食べてみたらマサラップ!! (おいしい) その後 Bay side に言って面白そうな乗り物を見つけたけどお試し運転中でのれなかった。そのあとろうろして、お金入れたら動く人の show をみて20時半の集合に備えてモールに戻った。帰りのバスでゆいと、かなみとイッソヨ、オプソヨ会話面白かった、ありがとう!!今日は明日の三時おきにそなえパッキングしたら寝ます。Good night!!

## DAY2 3月2日(土)

神戸支部 甲南大学2年  
岩崎薫

今日はいよいよバコロド、ドゥマゲッティに分かれて出発!こっちに来て1日ちょっとしか全員で過ごせないまま2組に分かれてしまうのはちょっと寂しかった。私たちバコロド組は4時出発だったので外はまだ真っ暗。飛行機の中では寝不足と1日目の疲労でよく眠れた。着陸と同時に目覚め、空港の外に出てみると、真っ青な夏空が広がっていて清々しかった。想像していたよりも暑くなく、日焼け対策の長袖でも平気だった。車に乗り込みいざ出発!はじめ窓の片側だけを見ていて気付かなかったが、あたり一面緑の草原。収穫後のサトウキビ畑が広がっていた。このネグロス島とは「サトウキビ」という意味なのだそうで、まさにそのど真ん中に来た感じがした。山がないので遠くまで見渡せ、遠くの雲がとても低い。

村に行く前にウェルカムパーティーで朝食を食べて、古い洋館や博物館を案内してもらい、いよいよファームへ。村の前の道で、たくさんの子供たちがすでに待ち構えていて、車を追いかけて来てくれる。あまりの驚きと嬉しさから、それまでの疲れや眠気が一気に飛んでいった。子供たちに手を引かれながら車から降りるときに、デジカメを落とした事にも気付かないでいると、子供たちが「落としたよ!」と持ってきてくれる。それから私がデジカメを手を持ったままにしていると、「You must keep it!!」と毎回ケースに入れてくれるようになった。この後ホストファミリーが発表されて、それぞれの家へ。初トライシクルに乗って学校へサッカーを観に行ったり、ビューティーコンテストの審査員をしたり、ハロハロを食べたり、マンゴーを食べたり、星を見に行ったり、夜の散歩で足の上にカエルが乗ったり。朝3時に起きたこともあって、長くて、初めての事がたくさんあった1日でした。

神戸支部 甲南大学 1 年  
竹山佳菜望

プログラム 2 日目、ファーム生活 1 日目。わたしは、ドゥマゲッティ組となり、朝 5 時に起き、空港へ向かった。しかし、そこで手続きなどの時間がかかり、飛行機に乗れなかった。なので、次の飛行機がでる 15 時まで、空港で待つことになった。

待つこと約 9 時間、飛行機に搭乗し、アキナ空港から飛行機に乗って約 1 時間半でドゥマゲッティへ到着。着いた空港は周りに何もなくて、上空から見ても畑や木しかない田舎だった。荷物も外から繋がっているのが見える程度のとても短いベルトコンベヤーで、私が普段から想像する「空港」というものからかけ離れていた。そして荷物を受け取り、空港の外へ出ると現地の案内人、シズニーと共にジプニーに乗って市内の観光をした。町の教会の中へ入ったり、広場にあるホセ・リサールの銅像をみたり、フィリピンが過去統治されていたスペインの機関銃を見たりした。前日までいたマニラと全く違う街並みだった。その後、シティの大型スーパーへ行き、水を買ったり、食糧を買ったりして、ファーム生活の準備を行った。

そこから約 1 時間程度ジプニーで郊外へ移動し、真っ暗になったところに、ファームへ到着。そこでまず驚いたのは日本と自然が全く違っていたところ。星が今まで見たこともないくらいに多く、そして家へ入っても虫がいるということにも困惑した。私たちが到着したときは、シズニーの家には 1 人しか居なかったが、私たちが到着したことを知ったホストファミリーの人や村の人が集まってきて、家の中がたくさんの人であふれかえった。ファームで過ごすに伴っての諸注意を受け、一人ひとりがホストファミリーに連れられ、各々の家へと行き、ファーム生活は始まった。

九州支部 北九州市立大学 1 年  
杉谷香波

今日はファームに移動する日。早起きをして、まだ真っ暗な中、ホテルを後にした。ファームでどんな生活が待っているのか、不安と期待が入り混じった気持ちで飛行機に乗った。Bacolod に到着し、目に飛び込んできたのは、首都マニラとは全く違う景色。まずは現地の方が、Silay という町を案内してくれた。英語でのガイドだったので、私にとってはかなりの集中力が必要だったが、初めて見るものばかりで新鮮だった。そして、これから 4 日間お世話になる村へ向かった。

村に着くとたくさんの子供たちが出迎えてくれた。人見知りをする子などおらず、皆駆け寄ってきてくれて驚いた。ホストとの顔合わせの時も、横から名前を聞かれたり、手を振ってくれたり、本当に人懐っこい。顔合わせをした後、家に向かった。実際に家に入ると、トイレやお風呂など日本とは全く異なる環境でこれから生活するんだという実感が

わきとても不安になったが、思っていたよりもずっと早く慣れることができた。ここではこの生活が当たり前なんだと思うと、すぐに順応できた。ホストの家族も皆優しく、あったかくて、とても良くしてくださった。

その後お昼まで、子供たちと遊んだ。花を摘んで持ってきてくれたり、現地の手遊びを教えてくれたり、日本語の単語を教えたりした。みんな元気で明るく、とても可愛かった。子供の数が多くて、名前を覚えるのがとても大変だった。

お昼を食べた後は、バスケットの試合を見に行った。突然行ったにも関わらず、試合の合間に行われたミスコンの審査をすることになった。テントの中の椅子に座らせてもらえた上に、ジュースとパンもいただき、フィリピン人のホスピタリティを肌で感じた。

今日は本当にたくさんの初めての体験をすることができ、とても濃い1日だった。

### DAY3 3月3日(日)

神戸支部 甲南大学2年  
木澤雄介

三日目は、フィリピンの農村部いわゆるファームに移動する日でした。ざっくりとスケジュールを書くと朝三時に起床、飛行機に乗って移動、バスに乗って移動、村に到着、ホームステイ先報告、自由時間って感じでした。ファームステイ初日は、ホストマザーといっぱいおしゃべりしました、フィリピンのこと、日本のこと、去年のExメンバーのこと、いっぱい喋りました。とても優しい人でホッとしていました。けど、衝撃的なことが二つほどあったのでそのことを書いて、この日記を終わらせてもらいましょう。

一つ目は、ホストマザーが引っぱり無しに「寝なさい。」と言ってくれたこと。お昼の1時にも関わらずです。眠たくないと言ったらホストマザーは目をまん丸にして信じられないと言ってました。どうやらフィリピンの、少なくとも僕がいた村の人たちは朝早く起きてお仕事をして、暑い昼間はゆっくりして涼しい夕方に活動再開するそうです。びっくり！

二つ目は、フィリピンのトイレの使い方がわからなかった時のことです。フィリピンのトイレは日本の水洗式トイレとはまったく違って、自分でバケツで水を便器にぶち込むんです。これがわからなくてホストマザーに聞いたら、今までの優しいホストマザーはどこえやら、大爆笑をかましてくれました。「あなたたちトイレの使い方を知らないの？www」こんな感じでした。しかもそれだけではなく隣の家の人を呼んできて「この子たちトイレの使い方を知らないのよwww」ってな感じで五分くらい笑ってました。僕たちもつられて笑ってました。笑うって素晴らしいですね。

フィリピン Ex.三日目では上記のような様々な衝撃が僕たちを襲いました！！

神戸支部 甲南大学1年  
土内茜

昨晩にドゥマゲッティに着いて、初めての朝を迎えました。  
八時に教会に行って、お祈りをしました。はじめは全く理解できなかったけど、ところどころ英語で説明をしてくださったので、ほんの少しだけだったけど、理解することができました。教会から帰ってきて、子どもたちと一緒に、シャボン玉や折り紙で遊んで、昨日よりもさらに仲良くなれたと思います。子どもたちは、折り紙の本を見ながら一生懸命、いろいろなものを作っていて、その集中力はすごかったです。

お昼ぐらいになって、昨日、仕事で家にいなかったホストマザーとホストファザーが帰ってきて、初対面しました。日本から持ってきた、お土産を渡すとすごく喜んでくれて、特にぷっちょがすごくおいしいと気に入ってくれました。すごく嬉しかったです。

その後に、ホストシスターと一緒にスクーターに乗って海を見に行きました。そこでは、泳いでいる人もいて、なんといっても景色がものすごく綺麗で、たくさん写真を撮りました。海を見たあと、ハロハロとハンバーガーを食べに行きました。フィリピンに来て、ハロハロを初めて食べてものすごくおいしいと思って、ホストシスターに伝えると、このハロハロよりもおいしいお店がもっとたくさんあるみたいです。

家に帰ってきて、みんなで夕飯を食べました。今日の夕飯は、チキンとライスと果物でした。果物は日本で見たことが無くて、でもすごく甘酸っぱくておいしかったです。夕食の後は、たくさん子どもたちとトランプをして大盛り上がりしました。そして、星を見たり、女の子たちとガールズトークをしたりして、どこの国でもガールズトークは盛り上がることに気づきました。

初めてファームの一日を経験して、トイレやお風呂など、まだまだ慣れない部分もあるけど、子どもたちと一日中遊んだり、話したりして、一気に距離が縮まった一日でした。

#### **DAY4 3月4日(月)**

神戸支部 甲南大学1年  
土肥慎一郎

4日目の朝はやはり、にわとりの声で朝5時ぐらいに起こされました。そしてやっぱり体中がかゆかった。蚊帳はあるが、まったく役に立たなかった。この日の予定では8時に、小学校集合だったが、行ってみるとたけし(竹山ちゃん)と近藤さんの他にだれもいなくて、近藤さん、たけしと僕で分かれて、何か子供たちに授業することになった。とりあえず、

日本の童謡を教えることにした。が、特に覚えている歌がなく、たけしに教えてもらい皆でふるさとを歌うことにした。しかし、あまり覚えていないので、僕も子供たちと変わらず雰囲気であんなに歌った。小学生時代真面目に歌えばよかったと後悔した。たけしに助けられ、なんとか教えることができた。そうしていると、さっきまでいなかった他の、日本人メンバーがやってきた。どうやら集合時間が変わっていて、皆はシドニーさん家にいたらしい。まあ別にたいしたことはなかったのだから気にしなかった。しかし、時間変更の連絡手段を考える必要はあったかなと思う。そこから子供たちと外で遊ぶことになった。子供たちはおんぶが大好きらしく何回も子供たちを背負い走り回ることになった。しかし、そこで少し大人びた女の子が僕のことを気遣ってくれて、おんぶをせがむ子を窘めてくれたのには、少し感動した。

こどもたちと遊んだあとは大学生ズ(Jamaica, Danica)が帰ってくるのを待ってダンスパーティーをした。彼女たちはダンスがすごく上手で見ているだけで楽しかった。僕も踊らされたが、下手くそで笑われてしまった。まあ日本人だから仕方ないと開き直すことにした。そのあと、下手くそな英語であるが、彼女たちや子供たちとおしゃべりを楽しんだ。異文化交流の楽しみを知った。もっと英語を話せば楽しいだろうなと感じた。この思いをわすれないように次に活かせたらいいなと思う。

神戸支部 関西学院大学1年  
小川理紗

プログラム4日目、Chiquitaでは予定を変更してマングローブ林と学校訪問をしました。マングローブ林ではまず入るのに一苦労で日本の田がさらにぬかるんでいるようなところででした。日本人のメンバーは現地の小学生に手助けしてもらったりしながらマングローブ林に入っていったのですがマングローブ林の泥はとて柔らかくて止まっているとどんどん沈んでしまうので、最後にはズボンまでつかってしまった人もいました。日本人メンバーは顔に泥で文字を書いたり、顔の半分を真っ黒にしてしまったり、童心に戻ってはしゃぎました。本当はマングローブの植林をする予定だったのに日本人が入ることに精一杯だったため、植林はなくなってしまったのがとても残念でしたが、とても楽しい経験ができました。

また、学校訪問では子どもたちと輪になって遊んだり、カンナムスタイルを踊る人もいたりフィリピン人の底抜けの明るさを感じました。おかゆのような食べ物もいただいて、こんなに暑いのにこんな熱いものを飲むのか！と驚いたりもしました。フィリピンの学校の校舎はとてカラフルなものも多く、花がたくさん咲いていて毎日通うのが楽しくなりそうなものばかりでした。

急な予定変更もあり戸惑うこともありましたが、フィリピンの広い空、どこまでも続くサトウキビ畑、爽やかな風、いろんな人たちの優しさを感じることができた素敵な1日でした！

## DAY5 3月5日(火)

神戸支部 甲南大学1年  
東佳太

フィリピン Ex.の5日目はファームステイが始まって4日目だったので自分の中でもだいぶその土地の生活に慣れてきた時期でした。5日目は、まず朝にサトウキビ畑に行って、サトウキビ栽培のお手伝いをしました。手伝いの内容は、雑草を抜くことでした。そのあとに、その畑などで使う土をつくる場所を見せてもらい、その土づくりの体験もすることができました。サトウキビ栽培や土づくりが手作業なので、大変だと感じたことを覚えています。そのあと、昼からは子供達と遊びました。子供たちと遊ぶのも最後だったので、思う存分遊びました。夕方には学校に行きました。学校では子供たちに日本の簡単な遊びと一緒にしました。例えば、じゃんけん列車やイスとりゲームなどです。そのあと、そこの小学生とバスケットボールの試合をしました。僕らより大分年下なのにとてもうまかったです。夜はそこのファームで過ごす最後の夜だったので、ファームの人々と僕ら日本人全員でダンスをしたり遊んだり騒ぎ倒しました。僕にとってこの5日目はファームの仕事を体験できたとても有意義な日でした。また、ファームステイ最後の日ということでさみしいという気持ちとステイさせてくださったホストファミリーに対する感謝の気持ちなど様々な思いがある日でした。

神戸支部 関西学院大学1年  
藪淵絢子

ファームステイ3日目！この日はステイ先のママが作ってくれたお弁当を持って、フィリピンの高校とGKへ行ってきました！高校では、ぼめとペアを組んで高学年のクラスに。みんなが温かく迎えてくれて安心する一方で、あまりの人数の多さと、これ二人で大丈夫なのかな・・・という不安でいっぱいでした(笑)でも実際授業が始まると、子供たちが日本について興味を持ってくれたおかげで、無事しらせることもなく授業を終えることができました(^o^)

そして GK へ移動！お昼ご飯は、バナナの葉の上にお弁当の中身をだして、それを手で食べるというフィリピンの食べ方でご飯を食べました。最初は、どうやって食べるんだろう？といった困惑もありましたが、現地の文化を経験していると実感し、すこし楽しくなりました^\_^昼食後は、石を運んで並べて、石のラインをみんなで作りました！作業をしているとフィリピンの子供が何人か手伝ってくれて、人の温かさを感じました。そんな優しい子供たちとお別れをして、みんなで川へ行きました！冷たくきれいな川で、足をつけて水遊びをしたり、とても楽しかったです！

その後家に帰って休憩したあと、シドニーの家でフェアエルパーティ\*ステイ先の家族に感謝の言葉を述べているとき、思わず感動してしまいました。わたしたちは PONPONPON を踊ったり、歌を歌いました。ほぼぶっつけ本番でしたが、うまく行ってよかったです。また子供たちのダンスはとても可愛かったです。

家に帰って、ファミリーと過ごす最後の夜。もうフィリピンの子供たちの笑顔に囲まれて過ごすことはないと思うと、寂しくなりましたが、また新たに色んな人との出会いがあることに、わくわくドキドキしながら眠りにつきました。

## DAY6 3月6日(水)

神戸支部 関西学院大学1年  
佐々木唯衣

この日はファームお別れの日。

バコロド組は10時出発だったので、みんな早めに用意して広場に集合。そして、最後まで子供達と遊びました。子供達は、私達の持ってきたシャボン玉やけん玉、色ペンなどを嬉しそうに使ってくれました。

また、教えた日本の遊び(アルプス一万弱)を完璧にマスターしていて日本人よりも速く、その上に日本語の歌まで歌っていたので驚きました。

最後のお別れのときには、泣いている子供やホストマザーまでも泣いてくれて思わずもらい泣きしてしまいました。

そして、寂しい気持ちを堪えて次のホストファミリーが待つ大学へ。

着いて、学食を食べたりしていると約4日振りのドゥマゲッティーのみんなと再会。久しぶりの再会でみんなのテンションは高めでした。

そして、各自ホストファミリーが紹介され、フィリピンの学生によるウェルカムパーティーで歌を歌ったり、フィリピンで人気のゲームをしたりして楽しみました。

フィリピンの人達はみんな陽気で歌やダンスが大好きでした。

それが終わると大学の中を見学。

たくさんの学生が様々なことをして楽しんでいました。

そして、各自ホームステイ先に帰りました。今まで日本人1人という経験がなかったので、不安でいっぱいでしたがホストファミリーがとても親切に接してくれて嬉しかったです。

この日は、出会いと別れのあった思い出深い一日となりました。

京都支部 京都教育大学 1年  
松岡将貴

はい、ではフィリピン Ex. DAY 6 の活動報告です。この日は、楽しかったファームからついに旅立たなくてはならない日でした。バコロダのファームステイの大半の思い出は、子どもたちと朝から晩まで、遊んですごしたことでした。そんな子ども達とも今日でお別れ、本当にさみしい気持ちで目覚めました、少しでも子どもたちとたくさんの時間を過ごしたい。みんなそう思ったのでしょうか、朝から、子どもたちのたまり場である近くの公園でみんな集合し力の限り、子どもたちとの最後の時間を過ごしました。それでも、別れはやってくるもの、ついにお別れの時間が来ました。日本人のメンバーも、ファームの子どももぼろ泣きです。こんなに自分たちとの別れを悲しんでくれるのかと思い、とっても胸が熱くなりました。でも、それほどまでに、印象強くみんなと過ごせたことは、ほんとうに幸せなことでした

## DAY7 3月7日(木)

大阪支部 関西大学 2年  
近藤夏奈

今日も日差しが眩しい。フィリピンは朝から蒸し暑いですが、窓から入ってくる涼しい風が心地よく自然の匂いを肌で感じる事ができる。照り付ける太陽はただ暑いだけでは無く、一日の始まりのエネルギーを与えてくれているように思う。

フィリピン Ex. 7日目。今日は city で迎える初めての朝だ。前日の夜私は、本日の予定をホストファミリーの子と一緒に確認しながら今日という日を心待ちにしていた。しかし、その思いとは裏腹に私は体調を崩してしまい、まず朝目を覚まそうにも、目が腫れて開かなくなってしまっていた。更に体温計で熱を測ると 38 度という中々の高熱を示し 1 人で歩くことすら出来なかった。そういう時こそ頭が回らないものだ。体がしんどいというのもあり、何から伝えて良いのか分からず、私は精神的にも肉体的にももう既に限界に近づいていた。いつも通りの体調なら、自分の状況を落ち着いて伝えることが出来るはずなのに、どうして良いか分からず悔しくて涙が出た。しかし、そんな時、私を救ってくれたのが、同じ家でホームステイしていた、Ex.メンバーの将貴である。彼は私の顔色を一目見るとすぐに異変に気が付き、ホストファミリーのダイナ(以下ダイナと記す)に身振り、手振りのジェスチャーも加え、必死で私の状況を伝えてくれた。その日の午前中はバコロダの観光ということもあり、社交的で明るく、ムードメーカーの将貴はメンバーと過ごせる時間を心待ちにしていたはずである。それにも関わらず、寝込んでいる私の体調を気遣い、ダイナ

と一緒に看病してくれていた。何度も、午前中の活動に参加して欲しいと伝えたのだが、「この本読む時間が欲しかったから」と一冊の本を取り出しその場を動こうとしなかった。私はその言葉から、彼の優しさと思いがりが十分に伝わり、とても年下とは思えない程彼を逞しく感じた。時間は正午を回り、私の体調が回復傾向にあることを確認すると、彼は安心したように午後の活動へと出掛けていった。その時私は彼とダイナに対して感謝の気持ちと申し訳ない気持ちでいっぱいだったが、早く回復してこの Ex.期間中に恩返しをするためにも、私はひとまず午後の活動もお休みを貰い、休息の時間に充てることにした。

薬の効果も有り夕方にはほぼ回復した私は、午後の活動を終え帰宅した将貴とホストファミリーの子たちと共にショッピングを楽しんだ。その際、ショッピングモールで何人か Ex.メンバーにも会うことが出来た。体調を崩していたことを皆が気にかけてくれ、そこで会うことが出来なかったメンバーからも携帯で撮影したムービーでメッセージを貰い、そのメンバー皆の優しさに感動して目頭が熱くなった。

その後帰宅し、私たちはホストファミリーと日本、フィリピンの文化の違いや日々の生活について語り合い内容の濃い充実した時間を過ごすことが出来た。

今日一日で私はメンバーから大切なことを沢山教わったように思う。彼らの仲間を思いやる強さと優しさ、正義感は言葉では簡単に表現することは出来ないが、自分を支えてくれた彼らに私は今、心の底から彼らに感謝している。そして、この素晴らしいメンバーの一員であることを誇りに思う。フィリピン Ex.も残すところあと僅かとなってきたが、このメンバーで過ごすことができる一日一日を大切に、最高の思い出をつくっていききたい。そして、少しでもメンバー1人ひとりの支えになれるよう努力していこうと思う。

神戸支部 関西学院大学1年

田井菜々子

シティ2日目のこの日、午前中はネグロスを観光ということで、Balay Negrense と The Ruins に行きました。Balay Negrense は昔、実際生活していたお家そのまま公開されていて、現地の方が丁寧に中を説明しながら案内してくださいました。この建物の歴史を感じることが出来、当時のライフスタイルがそのまま残されていて、とても素敵なお家でした。The Ruins も大邸宅の残で周りの緑との風景がとても素敵で、時の流れがゆっくりしていて、のんびりしているだけでも気持ちのいい場所でした。二カ所とも素朴な良さがあって、歴史を感じることが出来ました。

お昼はみんなでフィリピンに来てから良く目にするけど食べる機会がなかった Jollibee!!! ファーストフードだからハンバーガーなのかと思っていたら、ご飯とチキンがセットになって出てきてびっくり、だけどなかなかボリュームで美味しかったです。

午後からは大学の生徒さんたちと交流しました。お互いの国の国歌を歌ったり、自己紹介をしたり、自由にお話ししたり、フィリピンの生徒さんはみなさん愉快で、日本に興味を

持った人も多くて、とても楽しい時間でした。最後に日本とフィリピンがこれからも仲良しな関係でありますようにという願いを込めて、それぞれ日本に帰って何をするか、誓いを風船に書いて空に飛ばしました。

こうやって実際にフィリピンの大学生と交流することで、うわべじゃなくて本当にこれからも日本とフィリピンが仲良しでより良い交友関係を保ってほしいと思うようになりました。

その後は Bay Walk に連れて行ってもらいました。海辺の景色がすごく綺麗で普段夕日が沈んでいくのをじーっと見ることはなかなかないので、水平線に沈んでいく夕日に感動しました。そのままみんなで海辺でわいわい晩ご飯。

フィリピンの大学生はみんな陽気で楽しい人ばかりでいつもわいわいしていてすごく楽しかったです。

## DAY8 3月8日(金)

大阪支部 関西大学2年  
頼光拓真

天気はどんより曇り、ときどき雨。「なんで今日に限ってー！」みんながそう口に出しただろう。重々しい雲の中、バスは進む。移動中のバスではお疲れムードの子もちらほら。

「おいおい、まだ行き道だぞ！」っていう顔を Carlo がしていた。

なかにはとっても元気な男たちも。こういう時にはとても頼もしい。

その姿を楽しみながら時は過ぎてく。

やっと到着。海の前でバスが止まる。待ちに待った景色とは！？・・・

「なんだ、やっぱりこんなもんか」少し落胆。

そこに広がる景色はお世辞にも白い海、青い空とは言い難かった。

ボートに乗っても高揚感はあまりない。エンジン音がやたらうるさいだけだ。

しかし。

Lakawon Beach においてそれは存在した。

誰もが夢見た樂園が。

青い空、白い砂浜、そして透き通るほど透明な海が。

日本にはよほど存在しないだろう景色がそこに広がっていた。

気づくとあの重々しい雲はどこかへ消え去り、空も青一色。

こんな状況で気分が高まらないはずがない！

その後はよく泳ぎ、よく遊んだ。

「また来たい。」そう思わせる海だった。

きっとこの日はみんなにとって最高の思い出になっただろう。

神戸支部 甲南大学1年

鶴田宏美

ホームステイ先の人に気を遣って、この日も早くに起床し、早めに準備を済ませた。私が起床したしばらく後に、ホームステイ先の大学生も起きてきた。フィリピン人は朝に髪の毛を洗うのが習慣らしい。彼女の洗髪が終わると、家族そろって朝食を食べた。ご飯の前にはいつも通りキリスト教のお祈りがあり、その後に私が教えた「いただきます」を皆で言ってから食べた。朝食が終わると、大学へ。雨が降っていたのでバスとタクシーを利用した。大学に集合した後、バスで海へ向かった。かなり長時間の移動だったので、私はほとんど寝ていた。途中でバスから外を見ると、数日前まで生活していたファームと似たような場所があり、子供たちがこちらに気づいて手を振ってくれた。ファームが少し恋しくなった。バスから降りた後は、船に乗ってビーチまで向かった。到着までの間は、まるで絶叫マシーンに乗っているようだった。波がくるたび船が大きく揺れ、思わず「キャー」と悲鳴をあげていた。私は船の一番前に座っていたのだが、ビーチに着く頃には服がびしょ濡れだった。そこからはビーチで多くの時間を過ごした。フィリピンのビーチは日本より砂がさらさらしていて、海も綺麗だった。私は泳ぐのが不得意なので、足が届くところまで海に入った。下を見るとヒトデがいて、皆で拾い集めて写真を撮った。海に入るのに飽きると、ビーチでドッジボール。日本のルールとは異なった、フィリピン式のドッジボールをしたが、片方のチームはただひたすら逃げ続けるだけなので、日本式のほうが楽しいと思った。昼食にはチキン。フィリピンに来てから何回食べたんだろうか。大きくて食べるのが難しいが、皆お腹が空いていたため、ワイルドになって食べていた。フィリピンの人たちはずっと元気で、いつまでも楽しそうに騒いでいたが、日本人は後半疲れて休憩ばかりしていた。帰る頃にはすっかり日焼けしていて、水着の跡がくっきり、背中が真っ赤になっていた。帰りもバスに乗って大学まで戻ったが、その間何故だか皆が行きよりも元気だった。突然大合唱が始まった。バスの前方と後方で違う歌を歌っており、中間にいた私はわけがわからなかったが、眠たかったので寝た。大学に到着し解散した後、昨日から約束していたネイルサロンへ。私のステイ先の子と、友達のスエイ先の子数人で行った。好きなネイルのデザインを選ぶと、さっそくネイリストが爪の手入れをしてくれた。ファームでの生活を経験してきたこともあり、爪がすっかり汚くなっていたので、綺麗にしてもらえて嬉しかった。ピンクと白を使った可愛いデザインの爪が出来上がり、テンションが上がった。だが、時間が遅くなっていたので、十分に乾く前に帰る準備をしようとしてしまった。そのせいで、せっかくのデザインが少し崩れてしまった!!少しだけ気分が下がった。その後バスでステイ先へ。フィリピンの大型バスはいつも乗客が多く、長蛇の列に並んでバーゲンのように押し合いながら乗らなければならない。何とか席を確保できてよか

った。帰宅後は家族そろっての晩ご飯。毎回家族全員でテーブルを囲んで、楽しく話をしながら食事をするのが、「なんだか良いなあ」としみじみ感じていた。

## DAY9 3月9日(土)

東京支部 慶應義塾大学4年  
富永憲爾

この日は、午前中のうちに夜泊まる予定のホテルに移動し、それからランチ&ショッピング、夜は Cultural Night であった。

Cultural Night では、日本、フィリピンの参加者がともに自国の文化(音楽、ダンスなど)を披露するのであるが、日本側の参加者が披露したのは、Tomorrow(岡本真夜)、PONPONPON(キャリーぱみゅぱみゅ)、Top of the World(The Carpenters、日本語版と英語版を披露)であった。特に、Top of the World は、世界的に有名な曲であったことから、フィリピン人の参加者も一緒に歌ってもらい、会場が一つになることができた。

また、Cultural Night の中で、Host Students と Guest Students がお互いにメッセージを交換する場もあり、この場では皆が涙した。今回お世話になったのはほんの数日だけではあったが、やはり別れは辛いものであった。

Cultural Night が終わった後は、ほとんどのメンバーが参加してクラブで楽しいひと時を過ごした。翌日朝が非常に早かったため(AM4:30 起床)、あまり遅くまでいることはできなかったが、最後の夜に両国の参加者と盛り上がり、フィリピン最後の夜は忘れられない夜となった。

個人的なことを書けば、この日のプログラムを通して、音楽は人々の心を一つにすることができるのだ、ということを実感した

神戸支部 関西学院大学1年  
堀口将太郎

バコロドで実質最後の日、朝起きてホストファミリーと一緒に話して、なんだかすごくさみしくなった。ホストスチューデントのジュリエットと友達に連れられて、タワー見たりとか、町の市場を通り過ぎたりしたけど、町の市場ぱっと見た感じはまあいいんだけどなんかにおいがひどかった。夕方にはほかのみんな全員でお別れパーティーですごく楽しかったけれども、最後の最後って感じがしてしまってなんだか落ち込んでしまっていたな。パーティーの後にフィリピンのバーにいて、テンションあがった！！けど最後のみんなとのお別れが速くて、めっちゃさみしかった。ここで過ごした事を通してもっと自

分を出すべきだと考えるようになったこと。

## DAY10 3月10日(日)

東京支部 立教大学1年  
江畑俊行

DAY10 に関してはプログラム上、主な活動は行っていないため、メンバー全員で行った「10日間の学びの共有」で感じたことを簡単に述べたいと思います。

フィリピン Ex.のメンバー22人が同じプログラムで同じ経験をしたものの、「学び」は多種多様でした。つまり、プログラムを通して感じたことや気づいたこと、さらに現地の人たちの交流の仕方なども人によって変わってくるということです。なぜなら、メンバー22人がそれぞれの視点や以前の経験などの背景がそれぞれ異なっていたからです。

メンバーから聞きたいいくつかの「良い学び」を紹介すると、「幸せについて」「笑顔の大切さ」「現地と同じ生活を送ることの意味」などです。

一つ目の「幸せについて」は、ファームステイで多くの子供たちと触れ合ったことで感じたことであると思います。

おそらく、多くの日本人は裕福でないフィリピンの子供たちのことを「かわいそう」などと思っていたでしょう。しかし、実際はみんな明るく元気で、何より生き生きしている子供たちがある意味本当の幸せであり、お金があってもお互いを妬みあったりしている人は、幸せではないということ気付かされました。

二つ目の「笑顔の大切さ」は、ファームステイの子供たちだけでなく、多くのフィリピン人が、他の人と話をする際にしっかりと相手の目を見て笑顔を見せているということです。一般的に日本人は異文化交流・英語でのコミュニケーションができないなどと言われていたが、しっかりと笑顔やアイコンタクトなどで相手と快く関わろうとしている意思をしっかりと伝えることができおらず、そのことから改善するべきであると思いました。

「英語コミュニケーション」と「異文化コミュニケーション」は異なるもので、フィリピン人の英語力もちろんのこと「異文化コミュニケーション」をしっかりと習得しているように思いました。

三つ目の「現地と同じ生活を送ることの意味」は、このフィリピン Ex.の一番の魅力でもあり、現地の人たちと同じ生活を送ることで、本当の意味での交流をすることができ、新たな発見が生まれるということです。

単に外国に行っても、日本人が好むようなホテル・食事などに執着して生活を送るだけでは、現地の人たちの習慣・文化を体験することができず、また現地の人たちと深くかかわることができません。そのため、今回のプログラムでフィリピンの生活をそのまま体験し、フィリピン人と深く交流できたことは、本当の意味で異文化に飛び込んだということの意味します。

DAY10 はコンテンツはなかったものの、9 日間の振り返りを行い、メンバー間で学びを共有し、さらに個人レベルでの学びや気づきを価値のあるものにしていくことができたため、とても重要な 1 日であったと思いました。

神戸支部 甲南大学 1 年  
山島陽香

フィリピン Ex.最終日は朝 4:30 集合でバコロドからマニラへ移動しました。前日にパーティーがあって夜遅かったのでとても眠かったです(笑)マニラについてから朝ごはんを食べて、マーディーさんの家で 10 日間のプログラムのフィードバックをしました。メンバーそれぞれがフィリピンでの生活でよかったこと、難しかったこと、学んだことを発表していきました。みんなそれぞれいろんなことをフィリピンで感じ取っていて、それが聞いたことは、自分にとっても大きな学びでした。その後、マーディーさんの家の前で集合写真を撮ってフィリピンで Ex.が終了しました。私はその後アフターとしてボラカイとセブへ行きました。

# フリーテーマエッセイ

神戸支部 甲南大学 4年

石川 高寛

約10日間フィリピンに滞在して感じたことは危険な場所であるということ。その理由として日本が安全すぎる国であること、先入観が挙げられる。ストリートチルドレンの存在と大きなショッピングモールでの持ち物検査、ショットガンを持つ警備員からでも日本との違いが明確にわかる。しかし、危険なように見えるフィリピンでも生活している人々は普通に夜道を出歩いている。日本人から見たら衣服もままならない人がいるだけで怖くてどうしようもないが現地の人はいろいろと割り切っているようにトライシクルやジプニーに乗る。様々な交通手段が存在するフィリピンでは日本人からすれば乗りたくても怖くて乗れない。勧誘のすごいタクシーに出会ってしまったら尚更どうしようもない。

旅行者がぼったくられたり危険な目にあうことはよく聞く話であるがそれを防ぐためにはどのようにすればいいのか。言葉を覚える、雑誌を見て情報を得る。それだけでは不十分やはり現地の友人が必要であるということだ。現地の住人の方が雑誌の情報よりも確実性があるし実践も豊富だ。英語だけではやっていけない旅行で現地での旅行を楽しむためにはやっぱり現地の友人をひとりでも作っておくことが必要である。そう言った意味でも国際交流できる場を一つでも多く持っていることはとても重要なことであると感じた。英語を話すことが恥ずかしくて外国人と話せないと言うのではなく少ししか話せないから話さないとかでもなくまずはコミュニケーションすることが一番重要である。話さなければ何を考えているか意思を表明できないからである。本当に旅行を楽しみたい。そしてそのためには現地の友人を持つことが大事。なれば少しでも英語を話せる環境があるなら飛び込んでいくべきなのである。英語が話せないからダメなんじゃない。理解する姿勢がないからダメなんだ。最後の方書きなぐってしまっただけ何を伝えたいのかが散漫してしまったけれども結局僕が言いたかったのは理解する気持ちを途切れさせるなということだ。それさえ忘れなければなんとなく会話もわかるようになる。

大学生なんだからある程度の英語は出来るだろう。センター90点だった僕でも困らない程度になんとかになった。それも上記の気持ちを続けていたからこそだと思っている。フィリピン Ex.は僕にとって言語でコミュニケーションするということを知ったプログラムになりました。

## 「フィリピンの気候と人柄」

神戸支部 甲南大学 2年

岩崎 薫

私はこのフィリピン Ex.に参加して、今回初めてフィリピンを訪れました。それまで私にとって東南アジアは、太陽が近くてむしむしと暑く、おいしい南国フルーツがたくさんあって、暖かい気候のため人柄もおおらかで穏やかというイメージでした。

でも実際は、フィリピンは思っていた以上に湿気が多く、くせ毛の私には相当つらい。太陽の光はキラキラと熱いけれど、日本のようにアスファルトの地面が少ないせいか日陰に入るととても涼しい。乾季だと聞いていたのでもずっといい天気が続くのかと思えば、今にも雨が降り出しそうな曇り空の日もあれば、強い雨が突然降り出したりもする。天気がいい日でも、日光に当てないと洗濯物がなかなか乾いてくれなくて、何日も干しっぱなしにしないといけない。蒸し暑いと聞いていたけど、意外にも長袖で過ごしても耐えられる。などなど、気候の面だけでも実際に行ってみて初めて分かったことがたくさんありました。

また、私のイメージの中ではおおらかで穏やかな人が多いと予想していましたが、太陽の強さに負けないエネルギーで笑顔の絶えない人々ばかりだったように思います。ホストファミリーや村の子供たちの笑顔や優しさが、暑さと湿気のダブルパンチでへとへとだった私を笑顔にかえてくれました。だんだん現地の人たち皆から何事にも負けないパワーを感じはじめると、動物や植物、建物まで、そこにあるもの全部がいきいきしているように感じました。

「笑っていると楽しい気分になるし、笑顔を受け取った人で嫌な気分になる人なんていないだろ。だから、疲れていても悲しくても笑うんだ。」と、ホストのお兄さんは言っていました。大事なことだけど、忘れてしまうことが多いです。難しいことだけど、私もフィリピンで出会った人たちを見習って、心がけてみようと思います。

## 「学び in Philippine」

神戸支部 甲南大学 2年

木澤 雄介

今回私のフリーエッセーでは、Ex.中に感じた自分自身のことについて書きたいと思いません。

今回の Ex.で私は非常に心配性だということを知ったと同時に、後輩に対するに上級生の持つ影響力の大きさを知りました。今回の Ex.中私はメンバーの身の安全について、常に悩んでいました。ビフォーやアフター（プログラム期間以外でメンバーと一緒に海外で遊ぶこと）でメンバーが危険な目に合っていないかということや、プログラム中危険な目に

合っていないか常に心配でした。これについては、日本にいるときから Ex.に参加する前から知っていましたが、Ex.に参加することで思い知りました。現地のフィリピン人スタッフのことでさえ、100パーセント信じきることはできませんでした。心のどこかで疑ってしまっていました。これについては、どうすることもできないのではないのでしょうか？なにか良い対処法をご存知の方は教えてください。

次に、後輩に対する影響力です。自分自身今まで後輩に対する影響力は全くないのだと思っていました。特に自分には。でも、Ex.期間中さまざまな後輩と話をしている中で、様々な上級生に影響を受けていることを知りました。その影響を与えた上級生の中には自分も含まれていました。これに気づけたことは、本当に自分のこれからの大学生活に大きな影響を与えたのではないのかと思います。

私が Ex.で学んだことは実はもう一つあります。それは後輩の持つ大きな影響力です。後輩の何気ない行いが様々な上級生に影響を与えているのだということを私は知りました。その影響を与えられた上級生の中には自分も含まれています。

その影響力をこれからフル活用して行ってほしいです。

「フィリピンが大好きになった理由」

神戸支部 関西学院大学1年  
小川 理紗

私がこのフィリピン Ex.に行こうと思った理由は、ただ単純に発展途上国に行ってみたいと思ったからでした。小学生のころ見たテレビ番組「世界がもし 100 人の村だったら」の影響で発展途上国の開発に携わるような仕事に興味をもち、いつか実際に行ってみたい、自分の目で、耳で、自分が何を感じるか確かめたい、と思ったのがきっかけでした。

フィリピンに行くまでの私はフィリピンについて「発展途上国」や「治安の悪い国」というイメージしかもっていませんでした。でも Ex.に参加してフィリピンに対するイメージが大きく変わり、フィリピンとゆう国が大好きになりました。

私をこんなにもフィリピン大好きにさせてくれた1番の経験は、ファームステイです。現地のコーディネーターの方から、昨年のフィリピン Ex.ではたくさんの日本人の参加者がファームで体調を崩したとゆう話を聞き、ファームに向かうワゴンの中ではすごく暗い気持ちでした。しかし、ファームに着いた途端に、遊んでいた子どもたちがいっせいに集まってきて、そのときにいきいき気持ちが明るくなり、ファームでの5日間が楽しみになりました。ファームでは子どもたちと遊ぶ時間が大半で、アルプス一万尺や「こちょこちょ」など日本の遊びをしたり、フィリピンの遊びを教えてもらったりして時間をすごしました。知的障害があり、話せないけど写真を撮ってあげるとすごく嬉しそうだとびっきりの笑顔を見せてくれた子、私に1番なついてくれて4通くらいお別れのお手紙をくれた子、ファ

ームでの最終日、「いつでも帰ってきてくれていいからね」と声をかけてくれた村のおばあさん……。ファームの人はみんなあったかくて、優しい人ばかりでした。最初は嫌だった井戸水で体を洗うことも、トイレの水を自分で流さないといけないことも、食事中によってくる大量のハエも、日が経つにつれてどんどん気にならなくなっていった、ファームステイ最終日、ずっとここに居たい、ファームのみんなと別れるのが寂しい、と強く思いました。とうとうバスに乗り込まないといけないとゆう時、本当にさびしくて自然と涙が流れました。私が泣いているのを見て、「You cry!」とひやかしてきながらも目が潤んでいる男の子やひたすら泣き続けている女の子、5日間とゆう短い間だったけどとても仲良くなれたのだと感じました。

フィリピンで1番印象的だったのが、フィリピン人はいつも笑顔で、その笑顔がとても素敵だとゆうことでした。トイレで手を洗おうとしたとき水の出し方がわからなかった私に水の出し方を教えてくれたおばさんの笑顔や通りすがりに挨拶してくれるおじさんの笑顔、通りで出店をしているおじさんも、みんな本当に笑顔が素敵でした。

私がフィリピンを好きになったのもこの笑顔が1番の理由だったと思います。確かに日本のほうが恵まれているところはたくさんありました。でも私は日本に帰りたいとは全く思えませんでした。日本だったら見知らぬ人に挨拶したり鼻歌を歌いながら掃除をする人もいません。Ex.に参加するまでは「発展途上国」としてしかイメージできなかったフィリピンをEx.参加後ではフィリピンとゆう国を知って大好きになれたことが私がこのEx.で得た最も大事なことでした。

#### 「貧富の差」

神戸支部 関西学院大学1年  
佐々木 唯衣

このフィリピンEx.では人々の暮らしの違いを身に染みて感じました。

最初にマニラに行って思ったことは、日本の東京とあまり変わらないと思いました。高層ビルやショッピングセンターがあちこちに建っていて車も普通に走っている。私が想像していたフィリピンという国とは全く違ったものでした。そして、その後にバコロドのファームへ行きました。

そこは、マニラとは全く違う環境でした。同じ国とは思えないほどで正直驚きました。

実際、ファームステイではお風呂は井戸水を桶で流して入り、トイレも便座のないもので流すときも桶の水を手動で使い流していました。また、子供たちはお風呂を外で入っていました。

また、車もなくバイクに台車のついたトライシクルと呼ばれる乗り物や馬車のような乗り物が日常の交通手段でした。

食事は、主にお米と魚の入ったスープやチキンでした。また、ファームには日本でいう駄菓子屋のようなものがあり子供たちが頻繁にお菓子を買って食べていました。

ファームで4日間生活した後にバコロドの大学の学生の家ホームステイしました。

私のホームステイ先は、すごく山奥でしたが家は綺麗ですごく大きかったです。また、お風呂も広めのスペースでシャワーもありました。トイレも便座があり流れはそんなに良くなかったけど一応流せました。一番驚いたことは、ホストと同じぐらいの年齢の家政婦がいたことでした。私ともあまり年齢の変わらない子が朝も早くから起きて朝ご飯の用意をしている姿には驚きました。

フィリピンという一つの国でもこのように生活スタイルは違って、正直なところ初めは戸惑いもありました。でも、ファームの子供たちの明るく元気いっばいな様子もシティーの学生たちの陽気で愉快的な様子も同じもので、私はとても居心地が良かったです。

今回の15日間という間に、いかに日本で豊かな生活をしていたのかが分かり、またフィリピンという国の中でも場所によって人々の暮らしが180度違うことを身にしみて実感することができました。

「フィリピン Ex.が私に気づかせてくれたもの」

神戸支部 関西学院大学1年  
田井 菜々子

今回フィリピン Ex.に参加させていただき、たくさんの素敵な出会いと経験を通し、成長することができました。

フィリピンでの生活は慣れないことや不便なことばかりで決して快適な生活ではなかったけれど、日本で日々の生活の中で忘れかけていたことを気づかせてくれました。

ファームステイでの生活は特に考えさせられることが多かったです。

シャワーもトイレもろくになくて、暑くて蚊も多いしとても良い環境とはいえませんでした。ですが、そこにはたくさんの子どもたちや家族がいて...

子どもたちの純粋で愛くるしい笑顔と家族の温かさで溢れていました。

日本より住み心地は悪いけれどすごく心は心地よくて、毎日がとても幸せでした。

日本で生活しているといつも時間に追われていて、何か色々なものにおいていかれないように必死で、色んな欲を満たして幸せを感じようとするけれど、フィリピンの人たちは日常生活の中で、私たちが当たり前だと思っていることを当たり前だと思わず感謝して生きていて、無欲で自然な幸せ？を得ているような気がしました。また私は村で生活している時、なんだか純粋で何を見ても何をしていても楽しかった子どもの頃に戻ったような気分になって、安心したとともに懐かしさを感じました。

ここまで人の温かさや思いやりを感じたことはなくて、普段家族や友達が周りにいて、何

気なく生活していることが当たり前だと思っていた私ですが、どれだけ私が幸せなのか、恵まれているのかに気づきました。その瞬間感謝でいっぱいになりました。

日本は裕福すぎて今までこんなことを考えることもなく生活してきました。私が忘れかけていた大切なものに気づかせてくれたフィリピンの人たちに今は感謝の気持ちでいっぱいです。

「フィリピンで得たもの」

神戸支部 関西学院大学1年

堀口 将太郎

今回のフィリピン Ex.は私に多くの衝撃と経験を与えました。これまでまったくもってフィリピンについて知らなかった私ですが現地に初めて行ってみて感じた格差の大きさ、農村での暮らしの楽しさ、大変さ、歴史や文化について知るなかで自分が想像していた以上にフィリピンのことをしることが出来ました。多くの事が問題にもあるフィリピンですが私はとても好きになることが出来ました。最初のマニラでの数日間ではフィリピンの歴史や文化について多く知識をえることができました。ホセ・リサールについてして、サンチャゴ要塞であった革命に対してすごく感動しました。またジェイミーに聞かなかで日本がフィリピンに残したこと、スペインやアメリカがフィリピンに残したことやその歴史にある矛盾について知ることは自分の成長に大きくつなげられました。ドゥマゲッティでは初めて農村に泊まるということをしました。最初についた日はあまりにも自分との生活の違いに自分がついていけなくて、ブルーになりかけましたが、翌日になってしまえば慣れるものでなじめました。村にはなにかやることなんて多くなく、ものもそんない中で時間はゆっくりすぎていきました。それまではそういったゆっくりとすぎるような生活はいいものではないと思っていた私が、村での生活にすごく好きになりました。たしかに時間の流れはゆっくりなのに、そこでの生活は充実しており、とても不思議な感覚でした。バコロドにいった生活ではやはり、時間の流れは速く、あっという間に過ぎてしまった3日間でした。それでもそこで出来た友達とすごした時間は楽しく、貴重なものでした。もう一度フィリピンにいった多くの友人との再会をいつか果たしたいとおもっています。

## 「フィリピンの食文化」

神戸支部 関西学院大学1年

藪淵 絢子

フィリピンの食文化はスペインやアジア諸国からの影響を受けたバラエティー豊かなものです。主食は米ですが、その種類は日本と異なるタイ米で、少し細長くパサパサしたものです。そしてお米やおかずを一つのお皿に盛ります。また、食べ方も日本とは異なり、左手にフォーク、右手にスプーンという持ち方で食べます。私も最初は慣れないスタイルのため、なかなか上手く食べることができませんでした。ファームでは、この食べ方のほかに、バナナの皮の上に食べ物を置いて、手を使って直接食べるという食べ方をしました。この食べ方が、フィリピンの基本的な食べ方だそうです。初めて手を使って食べた時、どうやって食べたらいいのかわからず、戸惑ってしまいましたが、一度手を使って食べてみると、そのような戸惑いもなくなり、むしろ現地の文化に触れることができたことを嬉しく感じました。

フィリピンで、今まで食べたことのない食べ物をたくさん食べました。例えば、ハロハロ。ハロハロとはかき氷とミルクをベースとして、果物やアイスクリーム、ゼリーなどを加えて、それらを混ぜて食べるフィリピンのデザートです。私はフィリピンにいる間、ハロハロを4回も食べました。フィリピンで様々なご飯を食べてみて、おいしいと感じるものもあれば、そうでないものもありましたが、食を通して、よりいっそうフィリピンについて知ることができたと思います。

## 「フィリピンの人達との交流」

神戸支部 甲南大学1年

土肥 慎一郎

フィリピンでの経験において、一番印象に残ったのは、フィリピンの人たちとの交流でした。彼らはとてもフレンドリーで、気さくに話しかけてくれ、またとてもおもしろい人たちでした。しかし、やはり英語をうまく話せないことが、ジレンマでした。言いたいことは雰囲気などで伝わるのですが、難しいことなどは、伝えるのにじかんがかかるので、英語を話せたらもっと交流を楽しめたと思います。まあ下手なりの英語でも、とても楽しかったです。彼らは常に明るく元気で、ジョークが好きで日本人との国民性との差を感じましたが、それが彼らのいいところだと思いました。そのため、ファームでの生活はとても豊かといえるものではありませんでしたが、ファームの人たちはとても幸せそうでした。実際ばくも、トイレなど違いにおいて戸惑うことはありましたが、そこでの生活はとても楽しいものでした。彼らは歌とダンスがとても大好きで、毎日のように歌ったり、踊ったり

していました。それが彼らに元気を与えているのだなと感じました。実際ぼくも、ダンスは苦手でしたが、皆で一緒に踊るととても楽しく、気分もよかったです。まあ下手やったので笑われましたが。今回のフィリピン ex での経験はとても新鮮なことばかりでとても刺激的でした。また国際交流に興味があってもなかなか踏み出せない自分にとっては、国際交流をもっと身近に感じるいい機会になりました。

この機会を活かして、さまざまなことにもっと積極的になれたらいいなと思いました。

「フィリピン人の国民性について」

神戸支部 甲南大学 1 年

鶴田 宏美

フィリピンに約 2 週間滞在した中で感じた、フィリピン人の国民性について書こうと思う。まずは、「フィリピーノ・ホスピタリティ」だ。フィリピン人は私たち日本人のような未知の相手に対して親切で、手厚いおもてなしをしてくれる。日本人の場合、外国人を見ると身構えたり、自分の語学力に自信がなくて距離を置いたりすることが多い。また、同じ日本人同士であっても、知らない相手には関わらない傾向にある。だが、フィリピン人の場合は私たちに警戒する様子は一切見せず、道ですれ違うとにこやかに手を振り、あいさつをしてくれた。ファームステイ、ホームステイの時には、ステイ先の家族があたたかく迎え入れてくれた。毎日、朝早いときでも美味しいご飯を作ってくれた。常に私を気遣ってくれ、眠い時、疲れている時には「寝ていていいよ。」と声をかけてくれた。ステイ先の家族以外にも、ファームでは近所の家族や子供達が仲良くしてくれた。どこかのお兄さんがバイクで川まで連れて行ってってくれたり、友達の手先のお母さんが市場に連れて行ってってくれたり。子供達はとにかく可愛くて、人懐っこい。初めて会ったに近いのに、寄ってきて手を繋いだり、一緒にふざけたりして、すぐに仲良くなれた。私はこのような、他者を受け入れるフィリピン人の性格が好きである。

またフィリピン人は、南国特有の陽気で楽天的な性向がある。歌や踊りが大好きで、時間・場所にかまわず誰かが歌を口ずさんでいたり、クラブに行き踊ったりしている。ファームでは仕事をもつ人が少なかったが、休日は特に何をすることもせずベンチに座ってボーッとしていたり、ベランダに出ておしゃべりしていたり、気ままに暮らしていた。決して裕福な暮らしではないが、それでもファームの人々は皆笑顔で、楽しそうだった。つまり、「幸せ」を感じて生きているのだ。逆に私が暮らす日本では、便利な物であふれていて、欲しい物はたいてい手に入って、それでもまだ求める物が山ほどあって……。確かに不自由な生活だが、欲が尽きることはなく、少しのことでは「幸せ」を感じられなくなっている。本当はそこらじゅうに幸せが散らばっているのに、それに気が付かないでいる。私はフィリピンに滞在し、フィリピン人と交流をしたことで、忘れかけていた大切なこと

を教えてもらったように思う。

「フィリピン Ex.を通して感じたこと」

神戸支部 甲南大学1年

山島 陽香

私がフィリピンでの滞在で一番感じたことはフィリピンの人たちがみんないつも笑顔で楽しそうだったということです。その中でもファームでの体験が心に残っています。ファームステイ先での体験は驚きの連続でした。まず家には虫やイモリがいてトイレも「え、ここなの!？」という感じでシャワーも外でした。初日はフリーだったのでなにをしていいかわからず正直、「早く帰りたいなー」と思っていました。でも村の人たちはみんなとてもフレンドリーですぐ打ち解けることができました。特に子どもたちは元気でよく私の家に遊びに来てくれ、みんなで星を見に行ったり外で遊んだりしました。遠くで私を見つけた子どもたちが「はるかー！」と手を振りながら呼んでくれたのがとてもうれしかったです。初日には早く帰りたいのに、日が経つにつれ、まだ帰りたくないと思うようになりました。

村の環境は日本と比べてとても貧しいです。しかし、そこに住んでいる人たちは明るくいつも笑顔でした。私は、カルロが言っていたある言葉がとても心に残っています。「フィリピンの人たちが少しのご飯でも笑顔になるのは、その前に全くご飯がなかったから。貧しい家でも笑っているのはその前に住む家がなかったから。」私はこの言葉を聞いて、「ああ、だから村の人たちも笑顔なのかな」と感じました。私たちは、日本というとても恵まれた国で生活をしているけど、それは当たり前じゃないんだなと思ったとき、小さなことにも幸せを感じられるようになりました。

そして、もう一つ心に残っていることがあります。それは、フィリピンのストリートチルドレンについてです。私は、フィリピンに行く前、ストリートチルドレンについて調べていました。滞在中出会う機会はなかったけど、シティステイ先の子と話した時、フィリピン特にマニラには、やはりストリートチルドレンが多くいると言っていました。また、ショッピングモールで立ち寄った本屋の一冊の写真集に私は心を打たれました。そのなかにはごみの山の前で立ち尽くす子どもや、シンナーを吸っている子どもが写っていました。そして、その横には「シンナーは僕の問題や空腹を消してくれる唯一の方法だ。僕の人生は大変で、僕はそれを忘れない。」と書かれていて、私はそれを見てしばらく立ち尽くしてしまいました。その写真を見たとき、フィリピンだけでなく、世界中にストリートチルドレンがいることを改めて感じ、それを忘れてはいけないし、その子どもたちに何ができるか、考えるべきだと思いました。

私にとって、フィリピンでの16日間は日本ではとても体験できないことを経験し、楽し

いだけでなく、さまざまなことを感じ、考えさせられる日々でした。Ex.に参加して心からよかったと思います。そして、貴重な経験を一緒にでき、支えてくれたプログラムメンバーには感謝です。Ex.を通して、このメンバーに出会えて本当によかったと思っています!

「フィリピン行って思ったこと。」

神戸支部 甲南大学1年  
近藤 優哉

外国および外国人に偏見を持ちすぎた。なにも怖くない。実際行ってみると余裕で問題ない。むしろ日本人よりコミュニケーションが取りやすかったのが印象的。フィリピン人に比べて日本人はコミュニティ能力、所謂コミュカが本当に低いと感じた。対日本人の場合では数日、数週間かけて築くような人間関係をあちらでは1日で築きあげる事ができた。それはもしかしたら日本人のコミュカの問題ではなく、多少特別な状況であったからこそ可能であったのかもしれないが、私は日本人に問題があるのではと考える。

日本人の内気な性質により、今の豊かな日本があるのかもしれないが僕はベストとは考えない。もっとさらけ出せば少しは日本にある大量の問題をほんの少し解決できるのではないかと思った。

もう一つ感じたことは“オタク文化”である。日本ではアニメ、ゲーム、マンガというのはあまり受けがよろしくない。だがあちらでは自分がオタクであると公言するとたちまち人気者になった。このオタク文化に対する認識の差は、日本で生活している間にもニュースなどで知っていたが実際目の当たりにすると考えていた以上である。

外国のオタクは日本に憧れていた。だが日本にはそういうオタク専門のツアーがない。つまりお金の匂いがしませんか?

「フィリピンと日本の交流」

神戸支部 甲南大学1年  
竹山 佳菜望

フィリピンに行く前、私は英語があまりできないので、フィリピンの人とコミュニケーションが取れるかどうか、英語ができないから楽しめないのではないかと、とても不安でした。しかし実際行ってみると、意外にも、ボディランゲージやテンションでなんとでもなり、そして私はあまり英語ができないので、フィリピンの人たちがゆっくり話してくれたり、言葉を変えて話したりしてくれ、理解することができました。フィリピンの人たちは親切

で、ホストファミリーの人たちはまるで家族のように接してくれました。また、バコロドでは、ホストチューデントのおばあさんに貴重な話を聞くことができました。彼女が話してくれたものは、第二次世界大戦中のフィリピンの情勢でした。まさか現地の人からお話を聞けるとは思っていなかったので、とても貴重な体験でした。また、その時にホストチューデントから日本とフィリピンはずっと仲良くしていける、ということも言ってくれたのがとても印象的でした。日本からフィリピンへ行くのはとても簡単ですが、フィリピン人にとっては日本旅行というものはとても難しいものだと知りました。私がフィリピンでとても親切にしてもらったので、もし彼らが日本に来たときは、彼ら以上に親切にしようとおもいました。フィリピンで過ごした16日間はさまざまな発見があり、そしてさまざまな出会いがあり、わたしは今回の交流の絆を大切にしていこうと思いました。

「フィリピンに行って気づいたこと」

神戸支部 甲南大学1年  
土内 茜

このフィリピン Ex.は、私にとって初めての海外渡航でした。フィリピンに行く前は、不安になるどころか、何が不安なのかも分からなくて、飛行機に乗ったときにやっと実感がわいてきて、お風呂とか食事とか本当に大丈夫かと心配になる点が出てきました。

ファームに行って、日本とはまったく違う生活スタイルに驚きました。初日は、早く帰りたいと思うぐらい、ギャップがありすぎて、戸惑いました。トイレは桶を使って流すので、なかなかちゃんと流せなくて無駄に水をたくさん使ってしまいました。また、お風呂もトイレを流す水で、体や頭を流すので、最初はものすごく抵抗感がありました。そんな驚きだらけの生活スタイルでしたが、どれも一回体験したら、二回目以降は、さほど抵抗感も無くなって、きちんとできるようになりました。

やっぱり、ファームでの一番の思い出は、子どもたちと遊んだことです。私がだいぶ人見知りをしてしまう性格だったけど、ファームの子どもたちは出会ったときから人懐っこくて、すぐに打ち解けることができました。小学校に行ったとき、一年生のクラスにいったけど、みんなすごく元気で、何に対しても興味を持っていました。特に、私たちが首からぶら下げていた、カメラにもものすごく興味を示していて、カメラを貸すと、いろんな写真をそれぞれが撮っていました。シャッターの押し方とか、電源の入れ方とか、撮った写真の再生の仕方とか、何も教えていないのに子どもたちはすぐにマスターしていて、本当にすごいなと思いました。

シティでは、フィリピンの大学生活を経験をしました。放課後にケーキを食べたり、海辺に行って夕日を見たり、ショッピングをしたり、日本の大学生とほぼ似たような生活スタイルでした。でもフィリピンの学生のみなさんは、私よりももっと勉強熱心で、夢を

持っていて、見習わないといけないと思いました。そして夜、寝るときに、ホストスチューデントといろいろ語ったことがシティでの一番の思い出です。恋愛の話とか家族の話、日本とフィリピンの違いなど本当にたくさんのお話をしました。

このフィリピン Ex.で、私はたくさんの人々の優しさに触れることができました。そして、たくさんのお話を学びました。この学んだことを忘れないためにも、フィリピンで経験したことや、感じたことを学校の友達、家族に伝えていこうと思います。こうやって、たくさんのお話を学んで、なおかつ、フィリピンでの生活を楽しめたのもたくさんのおおかげだということも改めて、気づくことができました。A チームの皆さん、本当にありがとうございました!!!

「フィリピン Ex.で感じたこと」

神戸支部 甲南大学1年  
東 佳太

今回フィリピン Ex.に参加して本当にたくさんのお話を得たと思います。僕は海外に行った経験がなく、今回のフィリピンが海外に行く初めての経験だったのでとても不安でした。でもその反面とても楽しみでもありました。そんな気持ちでフィリピンに行ったのですが、そこではたくさんのお話を学ぶことができたように思います。現地の生活や食事、文化など多くのことを経験することができてとてもよかったです。そんなたくさんのお話をやる中で僕が一番思ったことは、お金がなくても幸せに生活できるということです。それはファームステイをしたときに思いました。ファームステイを行ったところは決して裕福なところとはいえなかったけれど、そこに住む人たちはとても幸せそうに暮らしていると感じました。僕自身も初めは多文化の暮らしに抵抗はあったけれど、子供たちと遊んだり、その村の生活の中でいろいろな人と交流していく中でとても楽しいものへと変わっていったように思います。

最後に僕が今回のフィリピン Ex.で安全に楽しくすごせたのは、たくさんの人たちに支えしてもらったからだと思います。フィリピン Ex.のメンバーや現地の人たち、ホームステイやファームステイでお世話になった学生やその家族にとっても感謝しています。今回このフィリピン Ex.で経験し学んだことは自分にとって大きな財産となったし、自分の中で大きな思い出にもなりました。これからも多くのことを学ぶために多文化にも触れていきたいし、そのほかでもたくさんのお話にチャレンジしていきたいと思っています。

## 「誕生地」

京都支部 京都教育大学 2年

松岡 将貴

今回の Ex. は本当にたくさんの素敵な人たちに出会えました。日本人もフィリピーナも。人との出会いが本当に自分の中での宝物になり、一生忘れられない、また会いたい仲間との出会いでした。

このプログラムでは、素敵な楽しい思い出がほとんど全部を占めています。ファームで子どもたちと過ごした日々、同世代の大学生たちと遊びまわり、ビーチも楽しみ、本当にキラキラした日々を過ごせました。

ですが、そんな中でも、時々はっと考えさせられることがたくさんありました。ストリートチルドレンとの遭遇などです。その子は、その日生きていくために、他人に物を乞います。自分とその子の違いは何なのだろう、かたや、旅行しこの食べ物おいしくないな、とか考え、かたや、生きるために食べ物がほしいと思ったり。生まれた場所家庭が、違うだけで、どうしてこんなにもちがう暮らしをしているのだろう。別に、その子が努力しなかったわけでもないし、私たちが努力して得たわけでもない。なんて、不公平なんだと思いました。今、自分が何をその子たちにしてあげられるかわからない。でも、実際に、見てしまった以上、見なかったふりをして生きていくことも息苦しい。自分の今まで、そしてこれからの生活を考えさせられましたし、考え続けています。

もやもや、を手に入れられたことは、とても自分にとってすごい刺激となりました。

## 「掛け替えの無い時間」

大阪支部 関西大学 2年

近藤 夏奈

「コケッコー。」一日の始まりはいつも鶏が知らせてくれる。目覚まし時計はいらない。誰も時間に焦る者は居らず、ただゆっくりと時が流れてゆく。太陽の光は人々のキラキラした笑顔をより一層輝かしいものに変えていく。日が暮れ、夜空を見上げると頭のすぐ上には満点の星が広がる。今日も夢と希望に満ちた幸せな明日を楽しみに眠りにつく。

私にとってこのフィリピンで過ごした 10 日間は毎日がスペシャルであり、目に焼きついた情景や肌で感じた空気感は一瞬忘れることは無く、今後より一層意味のあるものとして自分自身の中に刻まれていくに違いない。世界中には沢山の国があり、多くの人、そしてそれぞれの文化が存在する。そんな中フィリピンという一つの小さな島国で沢山の素敵な仲間に出会えたという奇跡、また数え切れない程の貴重な体験をさせてもらえたということに心から感謝している。そして今私は、このフィリピン Ex.10 日間共に笑い、共に泣き、

楽しいことも、苦しいことも一緒に乗り越えてきた最高の Ex.メンバーの一員であることを誇りに思う。

「It's my treasure.」フィリピン Ex.期間中私は現地の人々が頻繁に使うこの言葉に強く感銘を受けた。「Thank you.」の返答として返ってくるこの言葉は言うまでもないが直訳すると、「それは私の宝です。」という意味を持つ。実際現地の人に聞いたところこの言葉に込められた意味は、「させてくれてありがとう。」という相手に対する敬意、感謝の気持ちであり、常におもてなしの心を持ち接しているためその気持ちが直接、「私の宝です。」という表現に繋がっているのだ、と話してくれた。私はこれを聞き、こういった言葉が自然に出るのは、誰かのために何かできることをやりたい、という見返りを求めない本当の優しさ、思いやりがあるからだと感じ素晴らしいと思った。勿論私自身も、普段誰かのために何か自分が行動を起こす時、見返りを求めて動いている訳ではない。しかし、上記に示した考え方を知ることにより自分の今まで持っていた価値観を転換し、物事に対する視野を広げることができたように思う。私自身もこれからは、今まで以上に周りの人に感謝し、1人でも多くの人の力になりたい、そう強く感じた。

住む世界や文化が違えば当然、考え方や価値観も異なってくる。その国にはその国の特徴、素晴らしさがあり、それは実際に生活してみなくては理解できない部分もある。フィリピンと日本を比べてみても異なる部分は数多く存在する。今回私はその違いを目で見て、耳で聞き、肌で感じ、そしてフィリピン現地の人々と時間を共有することにより多くのことを学んだ。先進国であり、世界の人々から客観的に見て「豊か」と言われる日本で20年間生きてきた私は、フィリピンでの生活のトイレやお風呂、食文化、交通事情等、多くの日本での生活との違いに衝撃を受けた。それは、日本の良さや豊かさを感じたからと言うのではなく、その環境の違いに順応できない自分の未熟さを情けなく感じ、失望したからである。日本は確かに豊かな国かもしれない。必要なものはコンビニエンスストアに行けば大半のものが揃うようになっている。しかし、そんな豊かさとは裏腹に多くの人が心に余裕のない生活を送っているのではないだろうか。私はフィリピンで出会った沢山の人々の明日への希望と前向きさ、キラキラした優しい笑顔の裏に秘めた温かさや強さを見て、自分自身の普段日本で送っている生活での心の余裕の無さを痛感した。今まで私は、自分の夢や目標に向かい日々努力してきたつもりではあったが、その中でやはり将来への焦りや不安もあり、ただただ日常生活のスケジュールをこなすことだけに必死になっていたように感じる。ある程度の生活の豊かさは確かに必要かもしれない。しかし本当に大切なのは、フィリピンの人々が持つ「心の豊かさ」である、ということに今回のフィリピン Ex.を通し私は気付かされた。

Ex.期間中、辛くて苦しくて涙したこと、挫けそうになったことは本当に何度もあった。しかし、Ex.を共にした最高の仲間、フィリピンの現地の方々、日本で無事帰国することを心待ちにしてくれていた友人、家族、沢山の人に支えられ、掛け替えのない素晴らしい時間を過ごせたことに本当に感謝している。そして、今こうして大好きな人たちに囲まれ、

Ex.で学んだことを胸にまた新たな目標に向かい日々生活できていることを改めて幸せだと感じる。

最後に、このフィリピン Ex.で学び、感じ、習得したものを様々な形で社会に発信していきたい。そして、1人でも沢山の人の役に立ち、多くの人の幸せに貢献していくことができるよう努力していこうと思う。

「お金と幸せ」

大阪支部 関西大学 2年  
頼光 拓真

僕は「生活が豊かであること＝幸せ」という式は必ずしもイコールで結ばれないことを、この Ex.で学んだ。

僕はこのとても難しい問題をドゥマゲッティの地主に質問してみた。

「ドゥマゲッティの人々は日本と比べて生活は貧しい。しかし、ドゥマゲッティの人々はとても幸せそうだ。日本はドゥマゲッティに比べて生活は豊かだ。しかし、日本人はいつも疲れていて、ドゥマゲッティの人々より幸せそうではない。これはなぜか。」

彼はとても難しい問題だねと前置きした後こう言った。

「日本はとても豊かな国だからいろんなモノが溢れ返っている。人々はモノを欲しがり、求めてやまない。もっとモノが欲しい！もっと金が欲しい！と思い続け、体が壊れるまで働き続ける。一方、ドゥマゲッティにはモノが少ない。限られたモノしかない。だからドゥマゲッティの人々はその限られたものの中で工夫し、生きようとする。生きる最低限のものがあれば十分だと人々は思うようになる。だから、日本のように大きな物欲を持っていないんだ。だけど、フィリピンもだんだん豊かになり始め、モノが入ってきている。これからのフィリピン人がどうなるかは分からないよ。」

ドゥマゲッティでのファームステイの翌日から、バコロドにある豊かな家でホームステイさせてもらった。

この家で僕が何回も言われた言葉がある。ホストマザーは皮肉るように僕に言った。

「Japan is very rich!」

僕はその言葉に何も言い返すことは出来なかった。

日本にはモノがたくさんあり、生活はとても豊かだ。これは紛れもない事実である。

フィリピンに来てとても実感したことである。

しかし、「生活が豊かであること＝幸せ」ではないことを私はドゥマゲッティで学んだ。

僕の前にいるこの人はたぶんそれは分からないだろう。日本がうらやましいという思いで

頭が覆われているにちがいない。そう思ったから僕は何も言えなかったのである。

この例を振り返って見えることは、地主の言葉が本当ではないか、ということである。バコロドのホストマザーはフィリピンの中では比較的豊かな生活をしている。しかし、日本と比べるとまだまだと感ずるのであろう。多くの日本人が思うように、もっとモノが欲しい！もっとお金が欲しい！と感ずているのだらう。

しかし、忘れないでほしい。お金が全てではないことを。  
ドゥマゲッティの人々のようにお金はなくても工夫次第で幸せになれるのだ。  
住民たちの距離感が近く、毎日満点の星空が見える、あの町にも大きな幸せがあるのだ。

僕はこのことをフィリピンで学んだ。

「フィリピンと日本」

東京支部 慶応義塾大学 4年  
富永 憲爾

1日目、マニラで見学した箇所の一つに、フィリピンの歴史的遺跡を見学させていただく機会があった。その際、ガイドをしてくれた大学生からでたこんな言葉に驚いた。

「この遺跡は、戦争中に日本軍によって破壊されたのです。」

自分はフィリピンに行くまでにそのような事実を知らなかった。高校の日本史の授業の中でさえ、太平洋戦争の戦局は大まかに習ったものの、日本軍が現地で何をしたか、そこまでは習っていなかった。そのような事実を知り、驚き、悲しくなり、また、それまで無知であったことを恥ずかしく思った。

一方、フィリピンで道路を走る二輪車を目を向けてみると、日本製のものが多くを占めている。フィリピンの人たちは、日本に対してどのような印象を持っているのだろうか。これが自分の問題意識となっていくた。

フィリピンで会う人会う人に、日本に対してどのような印象を持っているのか尋ねてみた。すると、このような回答を多く受け取った。

「年代が上になると、やはり戦争の影響もあっていい印象を抱いていない人が多い。ただ、日本は素晴らしい技術を持っているから、それ以外の世代は好印象を抱いている人が多いよ。」

自分はそれを聞いて再び驚いた。過去に日本が犯した過ちを赦し、日本の技術力を評価してくれていたのだ。

このプログラムを通して自分が学んだことは、日本の技術力がいかに他国で評価されてい

るかということ、また、自分をもっと過去の歴史について知らなければならない、ということである。

#### 「英語コミュニケーションと異文化コミュニケーション」

東京支部 立教大学1年

江畑 俊行

フィリピン Ex.で初めてフィリピンに行き、現地の生活を送り、現地の人たちと交流したことで一つ気づいたことがあるため、それをフリーテーマエッセイとして書きたいと思います。

それは、本当の「異文化コミュニケーション」の大切さです。つまり、現地の人たちと交流してコミュニケーションをすることが、どのようなことであるか、またそのために何が必要であるかということです。

おそらくフィリピンなどの異文化に行き、現地の人たちと交流するには世界共通語の英語が不可欠であり、英語力を鍛えることが異文化交流をするうえで一番大切であると多くの日本人は考えているでしょう。しかし、それ以上に重要なことがあります。それは、現地の人たちの文化や思想を理解すること、そして相手と積極的にコミュニケーションをとろうとする姿勢です。

フィリピンの人たちは日本人に比べて英会話力はもちろんのことそれらの「異文化コミュニケーション力」があるように感じました。これからの日本人に求められていることは、その「異文化コミュニケーション力」です。国際化に伴い、日本人は英語力だけでなく、「異文化コミュニケーション力」が必要であると気付かされました。

今回のフィリピン Ex.で現地の生活を送り、現地の人たちと深く触れ合うことで、異文化に溶け込むことができたため、とても良い経験となり、学びも豊富でした。

#### 「フィリピン人の国民性」

九州支部 北九州市立大学1年

杉谷 香波

フィリピンでたくさんの素敵な人に出会うことができた。明るく、おおらかで、いつも楽しそうで、ホスピタリティを持った方々。その笑顔には何度も元気をもらった。

フィリピンに滞在している間、フィリピン人と日本人の国民性の違いを感じることも多々あった。まず、バスケの試合を見に行った時。司会の方が観客に、日本人が見に来たことを紹介してくれ、私たちのためにテントの中に席をつくり、食べ物と飲み物を用意し

てくれた。しかも、試合の間に開催されたミスコンの審査員までさせてもらえた。外国からお客様が来たというだけで、日本人はここまでの対応はしないだろう。

次に、日曜日の朝、ミサへ行った時。私はキリスト教徒ではないし、言葉も全くわからなかったので、ミサは正直退屈だった。それに、明らかにキリスト教徒ではないのにミサに来ている私たちを周りはどう思っているのだろうかという不安もあった。しかし、ミサでも司祭の方が、私たちを外国からのお客様として紹介し、歓迎してくれ、拍手を送ってくれた。私はとてもあたたかい気持ちになった。

また、シティのホストの家で、お姉さんと話していたとき、「日本人はとてもシャイだ。けどここはフィリピンだから、シャイにならないで。フィリピン人は知らない人にまでも挨拶をするくらい、みんな親しみやすい人だから。」と言われた。私は英語に全く自信がなかったが、とりあえず思ったことを伝え、たくさんの人と話す努力をしようと思った。

日本人の国民性は、外国の人からしばしば非難される。内気だとか、反応がなくて何を考えているのかわからないとか、確かに自分の生活の中でも心当たりがあることが多々ある。これは日本社会の歴史の中で確立されたものであり、全てが悪いものではないと思うが、やはり何も自己主張をしないのは良くない。様々な人や物事と関わるチャンスを自分から閉ざしているのと同じことだと思う。

私はフィリピンで、色々な人と関わる楽しさを学んだ。自分から積極的に関わることでたくさんのことを学べるということを実感した。これからも積極的に色々な事に関わっていく姿勢を大切にしていきたい。

#### 「フィリピンの音楽について」

九州支部 北九州市立大学1年

吉村 奈七美

私は音楽を聴くのが好きなので、このテーマに設定しました。私は出発前の勉強会でもこのテーマについて発表しました。調べたときは結構フィリピン内の有名なアーティストが出てきましたが、実際には洋楽や韓国のミュージックが主に流れていました。私はバコロドのファームに行きましたが、ステイ先の家にはスピーカーが付いていて大きい音で江南スタイルリミックスを流していました。そこで一番ビックリしたことは、ファームのような一見情報が入ってこなさそうな所にも江南スタイルの流行が伝わってくるということです。他にも **One direction** とか流れていて、音楽のすごさを知りました。たまにスピーカーから流れてくるフィリピンの音楽に合わせて歌う子供たちが、とっても可愛かったです。ファーム最終日には、ゆうやと、ファームのおじさんが江南スタイルでダンスバトルしていました。私達も子供達と手をつないでノリノリで踊りました。とても楽しくて音楽があつて良かったとおもいました。

そして、バコロドシティに移動したときには更に音楽を色々聴きました。マルーン 5 や、やはりここでも江南スタイルを聞きました。フィリピン人はクラブでそれらの曲と一緒に上手に踊っていてすごかったです。フェアエルパーティーのときに日本人メンバーが踊ったポンポンポンも気に入ってくれたみたいで良かったです。

フィリピンでは、フィリピン人がどんなに音楽を大切にしているのかも分かることが出来、また音楽というものを介して国際交流ができるということも学びました。これからは古い曲でも新しい曲でも、もっと聴いていきたいなと思いました。これから行く国でもその国の音楽や、共通して知っている音楽を通して国際交流していきたいと思います。

# 必要なもののリスト

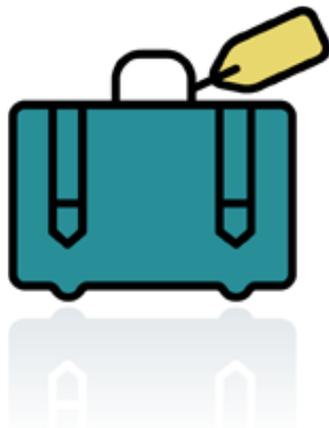
## 必需品

- ・ 着替え (洗濯可能)
- ・ タオル (いっぱい汗かくので多めに!)
- ・ 水着
- ・ 汗拭きシート (多めに!!)
- ・ 日焼け止め
- ・ 帽子
- ・ 虫除け
- ・ かゆみ止め
- ・ 長袖 (日焼け防止)
- ・ 懐中電灯
- ・ 薬 (ビタミン剤も)
- ・ トイレtp>トーパー (2ロール)
- ・ 日本のお土産 (二家族分)
- ・ ポケットマネー



## あったら便利

- ・ 手ピカジェル
- ・ 除菌シート
- ・ サンダル、クロックス ←すごく便利!
- ・ シャボン玉、折り紙、おもちゃ (子どもたちに)
- ・ 洗濯バサミ、ハンガー (洗濯して干すときに便利!)
- ・ 変電プラグ
- ・ 充電器 (電池式)



## 編集後記

神戸支部 甲南大学1年

鶴田 宏美

私はこの報告書を作成しながら、フィリピンで過ごした16日間の出来事を思い出した。振り返ると、フィリピンでの生活は毎日新しいことでいっぱい、生き生きと輝いていた。一日一日が濃くて、たったの約2週間が数か月間のように感じられた。そのぐらい、短い滞在期間で、多くの体験をし、現地の人や他の日本人メンバーとの親しい関係を築くことができた。報告書を読むと、他のメンバーもそれぞれ色々なことをフィリピンで感じ、学んできたことがわかる。

このEx. 中、私は毎日笑顔だった。それはなぜかーやはり、周りにいる「人」に恵まれていたからだろう。日本人メンバーは、皆個性豊かで、楽しい人ばかりだった。私はそんな皆が大好きだ。ファームが二つに分かれたときにはすごく寂しさを感じ、再会したときの感動は凄かった。そして、最後のフェアウェルパーティーでは、全員の心がひとつになったように感じた。彼らとの別れが本当に惜しかった。また、日本人だけではなく、もちろんフィリピン人も…。コーディネーターのマーディーさん、音楽を、そして少女時代を愛してやまないカルロ、優しい笑顔でいつも見守ってくれたダイアン…それから、ファームの人々、こどもたち、シティの大学生たち…。フィリピンで出会った人たちは皆、私たちをあたたかく迎えてくれ、親切にしてくれた。その陽気な人柄で、私たちを笑顔にしてくれた。こんな素敵なお人たちに会えて、本当によかったと思う。また、出会わせてくれたEx. にも感謝している。“Thank you.”

今後も、この出会った仲間を大切にしていきたい。